

マリ(チェレミス)語の複合動詞

——日本語の複合動詞との比較——

松 村 一 登

1

ボルガ川中流域は、フィン・ウゴル系のマリ語(Mari)、モルドビン語、ウドムルト語、チュルク系のチュワシ語、タタール語、バシキール語、スラブ系のロシア語などが話されている多言語地域である。本論文が取扱うマリ語は、チェレミス語(Cheremis)とも呼ばれる言語で、母語とする話し手は、62.2万人のマリ人のうちの約87%、およそ54万人である(1979年)。マリ人の大半はマリ自治共和国(約30万人)とその隣接地域、およびバシキール自治共和国(約10万人)に住んでいる。マリ語には、方言差にもとづく2つの文章語があるが、本論文は牧地方言および東方言にもとづく文章語(лугово-восточный марийский язык)のみを対象とし、以下で「マリ語」と言う場合にはこの文章語をさすものとする。

比較的よく知られているように、マリ語とチュワシ語、タタール語との間の言語接触は長期にわたり、その影響は、語彙はもとより、形態や統語構造の面でも顕著である。本論文でとりあげる日本語の「動詞+動詞」型複合動詞に非常によく似た構造が見られるのも、これら3つの言語に共通した特徴のひとつである。

日本語の複合動詞のように動詞を2つ組み合わせて用いることは、ボルガ川中流域の諸言語に特徴的な現象というよりは、チュルク系やモンゴル系の諸言語をはじめ、インド亜大陸を含むアジア大陸の諸言語の間では珍らしくない現象のようであるが、この種の構造が、形態や機能の点で相互にどの程度まで似ているのかについての詳しい研究はあまりされていない印象をうける。ボルガ川中流域のフィン・ウゴル系諸言語に限っていえば、この種の構造を用いているのはマリ語とウドムルト語に限られるとされており、モルド

ビン語やコミ語には同様の現象がないと言われている。マリ語の複合動詞は、チュワシ語、タタール語の影響下で発達してきたものとするのが通説である。尚、本論文で「複合動詞」と呼ぶ構造は、ふつう составной глагол ないしは сложный глагол という用語で呼ばれているものである。

2

マリ語の複合動詞を論じる前に、それと非常によく似ていると考えられる日本語の「動詞+動詞」型複合動詞(以下「複合動詞」と呼ぶ)の構造上の特徴をはっきりさせておく必要がある。

日本語の複合動詞は、後項動詞が通常の活用を行ない、前項動詞は連用形のままで形を変えない。

(1) **逃げ出す**, **逃げ出さない**, **逃げ出した**, **逃げ出せば**, **逃げ出そう**, ...
また、前項動詞がとっている連用形は、統語的には接続形として用いられる形である。

(2) 鳥が**逃げ**, 1羽もいなくなった。

以上の2点との関連において考慮しなければならないのは、連用形とよく似た機能をもつテ形である。連用形とテ形は、ともに接続形としてしばしば相互に置き換えが可能である。たとえば、(2)と(3)の間の違いを明示的に述べることは不可能に近い。

(3) 鳥が**逃げて**, 1羽もいなくなった。

さらに、複合動詞の中には、連用形であられる前項動詞をテ形にかえてもほとんど意味の違いが認められないものがある。

(4) a. **捜し歩く**——**捜して歩く**

b. **切り落とす**——**切って落とす**

また、ふつう補助動詞と呼ばれるのはテ形につく「みる」「あげる」のような動詞であるが、この種の動詞と、前項動詞を語彙的に選り好みせずに複合動詞をつくる「はじめる」「つづける」のような動詞との間に、テ形につづくか連用形につづくかという形式上の違い以外の明確な意味的・機能的区別がたてられるかどうかは自明ではない。

- (5) a. 戸を叩き始める。
 b. 本を読みつづける。
- (6) a. 戸を叩いてみる。
 b. 本を読んであげる。

このように、連用形とテ形との間には、(2), (3), (4) のような分布の重なりと、(5), (6) のような分布の相補性という、いずれも2つの形式の機能的類似性の高さを示す特徴がある。したがって、以下で日本語を問題にする場合には、いわゆる複合動詞ばかりでなく(6)のような構造についても注意していくことにする。

3

日本語の連用形ないしテ形にあたるマリ語の形式は、副動詞 (деепричастие) と呼ばれている形で、動詞 налаш 「取る」を例にとれば、

- (7) a. налын 「取って」
 b. налде 「取らないで」
 c. налмеке 「取ってから」
 d. налмешке 「取るまで」
 e. налшыла 「取りながら」

の5つが標準文法で副動詞とされている。複合動詞の前項動詞として用いられるのは、(7a) の形で、「н副動詞」(「н形」と略す) と呼ばれる。

н形は、動詞の形態論的タイプに応じて形がやや異なる。すなわち、第1変化の動詞(1人称単数現在形が -ам で終わる—куржаш 「走る」, куржам) のн形は -ын で終わり、第2変化の動詞(1人称単数現在形が -ем で終わる—күнчаш 「掘る」, күнчем) のн形は -ен で終わる。ただし、第1変化の動詞で語幹が2音節以上のもの (вашталташ 「変わる」) は、語幹がそのまま н形に相当する形となることができる。

- (8) a. куржын лекташ 「走り出る」
 b. күнчен лукташ 「掘り出す」
 c. вашталт толаш 「変わってくる」

上の例で、後項動詞の лекташ, лукташ, толаш は、日本語の「出る」「出す」「来る」にあたる動詞である。

マリ語の複合動詞も、通常の活用を行なうのは後項動詞だけである。куржын лекташ を例にとって、その現在形と第1過去形を示すと次のようになる。

(9)	現在形	第1過去形
1 sg.	куржын лектам	куржын лектым
2	куржын лектат	куржын лектыч
3	куржын лектеш	куржын лекте
1 pl.	куржын лектына	куржын лекна
2	куржын лектыда	куржын лекда
3	куржын лектыт	куржын лектыч

н形は、一方、意味的な制限のもっとも緩やかな接続形として幅広く用いられるという点で、日本語のテ形と非常によく似た形式である [Исанбаев (1961), 森田 (1982)]。

- (10) a. Изам школ гыч мӧнгыш толын, урокым ямдылаш тӱнгале.
 兄 学校 から 家へ 来て 授業を 準備する はじめた
 「兄は学校から家に帰ると、予習をはじめた」(時間的順序) (C 9)
- b. Кум марий, трубкаштым шуптын, кутырен шинчат. (I 84)
 3 男 パイプを ふかせて シャベって すわっている
 「男が3人パイプをふかせながら、すわっておしゃべりしている」
 (同時進行)
- c. Эчан вуйжым тарватен шижтарыш. (I 87)
 エチャン 頭を 振って 知らせた
 「エチャンは首を振って知らせた」(方法, 手段)
- d. Марий-влак, тидым шижын налын, ыресым ӧрдыжкӧ нангаен
 マリ人たち これを 感じて 取って 十字架を わきへ 運んで行って
 коденыт. (T 12)
 残した
 「マリ人たちは、このことを知って、十字架をどこか別の場所へ運んで行ってしまった」(原因, 理由)

- e. Тудым моло калыкын тошто ой дене тагастарен, ятыр
それを 他の 民族の 古い ことばと 比較して 多くの
икгайлыкым муаш лиш. (T 13)
類似性を 見つける できる

「それを他の民族の言い伝えと比較すると、多くの類似性を発見することができる」(条件, 仮定)

- f. Якуш эргыже, лүдыкшö лишеммым калыклан шижтарен,
ヤクシ 息子 危険 近づくのを 人々に 知らせ
чангым кыра. (M 7) (目的・意図)
鐘を 打つ

「息子のヤクシは危険が近づいたことを人々に知らせようと鐘を鳴らした」

- (11) a. 森があって, 川もある。(並列)
b. 学校で遊んで, 家で勉強する。(対比)
c. 席を立って, 廊下へ出た。(順序)
d. 手を振って歩く。(同時進行)
e. 目ががすんで, よく見えない。(原因・理由)
f. 歩いて帰る。(手段・方法)
g. 知っていて答えない。(逆接)
h. 歩いて 15 分かかる。(仮定)

テ形と比べ連用形の接続形としての機能は限定されており、たとえば、(11f), (11g), (11h) で連用形を用いることは不可能であろう。一般に、テ形は、自立した形式として (3) や (11) のような環境に現われる用法に機能的重心があると考えられ、(6) のような環境で補助動詞に伴われるのは、周辺的・副次的な用法と見てよいと思われる。これに対し、連用形は、(5) や次の (12) のように、他の形式に伴われて機能する形式としての性格が強いように思われる。

- (12) a. 手を振りながら歩く。
b. 本を買いに出かける。

この傾向はとりわけ話し言葉において著しく、たとえば、(2) と (3) を比べ

ると、(2)は書き言葉風の言い方である。

この点に注意してマリ語のH形をみると、形式としての自立性の点で、連用形よりはテ形によく似ていることがわかる。たとえば、H形は、いくつも連ねて用いることが比較的自由にできる。

(13) Куржын толын пурен лектын кайыш. (C 4)

走って 来て 入って 出て 行った

「(彼は)ちょっと立ち寄って行った」

また、マリ語の複合動詞の場合、H形と後項動詞との間に、否定動詞 [(14a)] や不変化小詞 [(14b)] が挿入されうるし、H形に付加小詞をつける [(14c)] こともできる。

(14) a. Павел кугыза куанен ок тем. (U 69)

パベル 老人 喜んで 否定 満ちる

「パベル老人は満足この上ない」

b. Чан йүк мүгыралт гына шинча. (C 38)

鐘 音 うなあって ただ すわっている

「鐘の音がうなりをたてている」

c. Эрлашыжым тудо мален кынелын веле ыле, Тамара миенат

翌日 彼 眠って 起きた ほんの小詞 タマラ 行って

шуын. (U 53)

届いた

「翌日彼が起床するかしないうちに、タマラは到着した」

(14)に相当する現象は、日本語でも見られる。

(15) a. 読んでもみない。

b. 読んでさえおいた。

c. 読んですらくれない。

さらに、複合動詞の前項動詞として、H形の否定形にあたる「де 副動詞」形 [(7b)を参照]が現われることができる。次の例において、малыде, лекдеは、それぞれ малаш「眠る」、лекташ「出る」の де 副動詞形である。

(16) a. Мый йүдвошт малыде коштам. (I 111)

私 一晩中 眠らないで 歩き回る

「私は一晩中眠らない」

- b. Тудо пöрт гыч лекде кия. (I 111)
 彼 家 から 出ないで 横たわる
 「彼は家から出ない」

この構造は、日本語の次のような構造に対応すると考えられる。

- (17) a. その本は読まないでくれ。
 b. どこにも行かないでおく。

以上のような比較から、マリ語の複合動詞におけるH形と後項動詞との間の結合は、日本語の複合動詞における連用形と後項動詞との間より緩やかであり、マリ語の複合動詞は形式上は、日本語の「テ形+補助動詞」構造に近いと考えてよいものと思われる。

4

日本語の複合動詞は、前項動詞と後項動詞の間の意味的關係によって3つのタイプに分けられる [長嶋 (1976)]。

- (I) 前項動詞 (V_1) が後項動詞 (V_2) を修飾するもの (例: 切り倒す)
 (II) V_2 が V_1 を修飾するもの (例: 読み通す)
 (III) V_1 と V_2 が対等の関係にあるもの (例: 飛び跳ねる)

それぞれのタイプは、次のようなテストによって区別できる。複合動詞 $V_1 + V_2$ とともに用いられる名詞を N で表わすとすれば、(I) は、「N が(を, に) V_2 」と言えるものであり、(II) は「N が(を, に) V_1 」と言っても「N が(を, に) V_2 」とは言えないものであり、(III) は「 V_1 たり V_2 たりする」と言い換えられるものである。

- (18) a. 木を切り倒す。(タイプ I)
 b. 木を(切って)倒す。
 (19) a. 本を読み通す。(タイプ II)
 b. 本を(通して)読む。
 c. *本を(読んで)通す。
 (20) a. 子供が泣き叫ぶ。(タイプ III)
 b. 子供が泣いたり叫んだりする。

これと非常によく似た分類をマリ語の「*n*形+定形動詞」型の構造に適用することができる [Чхайдзе (1960, 1968)]。

- (I) V_1 と V_2 が対等の関係にあるもの。例えば, миен толаш 「行って来る」 (мияш 「行く」, толаш 「来る」)。
- (II) V_1 が V_2 の修飾語となっているもの。例えば, воштыл каласаш 「笑って話す」 (воштылаш 「笑う」, каласаш 「話す」)。
- (III) V_2 が V_1 を修飾しているが, V_2 の語彙的意味が完全には失われていないもの。例えば, пеледалт шогаш 「咲いている」 (пеледалташ 「咲く」, шогаш 「立っている」)。
- (IV) V_2 が語彙的意味を失って形式化し, V_1 に主としてアスペクト的意味を添える働きをしているもの。例えば, мален колташ 「眠り込む」 (малаш 「眠る」, колташ 「放つ, 送る」)。

Iのタイプは, あるまとまりをもった一連の動作・行為を意味的に対等な成分に分解して分析的に表現したもので, 2つの動詞がいわば等位構造として結ばれた場合である。

- (21) a. Вүдлан миен толын. (C 4)
水に 行って 来た
「水を取りに行行って来た」
- b. Чавайн йолташыжлан кужу серышым возен колтен.
チャバイン 友人に 長い 手紙を 書いて 送った
「チャバインは友人に長い手紙を書いて送った」
- c. Йолташышт-влак тудын капшым шолып нангаен тоеныт.
友人たち 彼の 体を 秘かに 運んで行って 埋めた
「友人たちは, 彼の遺体を秘かに運び埋葬した」 (R 48)

IIのタイプは, *n*形が定形動詞に対して, 様態, 方法, 原因などを表わす副詞として働く場合である。

- (22) a. Эчан воштыл каласа. (C 25)
エチャン 笑って 話す
「エチャンは笑いながら話す」

- b. Эгерым келын вончышым. (P 113)
 川を 歩いて 渡った
 「私は川を歩いて渡った」
- c. Ануш лүман ик мотор үдыр кылмен колен улмаш.
 アヌシ という名の ある 美しい 少女 ここえて 死んだ 小詞
 「アヌシという名の美しい娘が凍死した(そうだ)」 (U 55)

このタイプは、次のような副詞句相当の n 形句の特別な場合とされる [Петухова (1982)]。

- (23) a. Эчан вуйжым тарватен шижтарыш. (I 87)
 エチャン 頭を 振って 知らせた
 「エチャンは首を振って知らせた」 [=10c]
- b. Нуно историйым изиш вашталтен ончыкта. (T 17)
 それら 歴史を 少し 変えて 見せる
 「それらは歴史を少し脚色して表わしている」

Ⅲ と Ⅳ のタイプの特徴は、意味の中心が n 形の動詞にあることで、V₂ の動詞の意味は、具体性が薄れたり [Ⅲ]、形式化したり [Ⅳ] している。マリ語の標準文法で、「複合動詞」と呼ばれるのは、このⅢまたはⅥのタイプとして分類されるものだけであり、このような構造の後項動詞として用いられる動詞は「補助動詞」(вспомогательный глагол) と呼ばれる。

- (24) a. Кавашке күзен кая. (R 44)
 空へ 昇って 行く
 「(彼は)空へ昇ってゆく」
- b. Овоп вожылеш, йошкарген кая. (U 64)
 オボプ 恥じる 赤くなって 行く
 「オボプは恥ずかしくなり、赤くなった」
- (25) a. Кү курык оржа картуз нерла лектын шога. (T 29)
 石 山 岬 帽子 鼻のように 出て 立っている
 「岩山が岬の先端のようにそびえ立っている」
- b. Йырым-йыр кугу чодра лүшкен шога. (T 29)
 まわりに 大きい 森 ざわめいて 立っている
 「あたり一面森がザワザワと音をたてている」

- (26) a. Зорин книгам
- лудын шинча.
- (С 33)

ゾリン 本を 読んで すわっている

「ゾリンは(すわって)本を読んでいる」

- b. Чан йүк
- мүгыралт шинча.
- (С 33)

鐘 音 うなって すわっている

「鐘の音が響いている」

後項動詞の語彙的意味の希薄化, 抽象化の度合いは, 個々の複合動詞によって様々である。たとえば, 動詞 налаш「取る」の意味が前項動詞の意味に応じて抽象度を増していく様子を, 次の例で見よう。

- (27) a. Тылзе үдырым шке
- декше шупшын налеш.
- (Т 12)

月 少女を 自分へ 引っ張って取る

「月は娘を自分のところに引き寄せた」

- b. Марий-влак деч тудо тоштыенг ойым
- возен налын.
- (Т 18)

マリ人たち から 彼 古人 ことばを 書いて 取った

「彼はマリ人たちから言い伝えを採録した」

- c. Чыным Пöтыр
- вашке пален налын.
- (U 68)

真実を ヒョードルまもなく 知って 取った

「ヒョードルにはまもなく真実がわかった」

後項動詞は, 意味が完全には形式化することがなく, налаш「取る」と пуаш「与える」, пураш「入る」と лекташ「出る」のように対になる意味をもつ動詞は, 複合動詞としてもこの対立を保つことができる。

- (28) a. Кориш киндым
- катен налын.
- (С 42)

コリシ パンを ちぎって取った

「コリシはパンをちぎった」

- b. Рвезе-влак Коришлан киндым
- катен пуышт.
- (С 42)

子供たち コリシに パンを ちぎって与えた

「子供たちはコリシにパンをちぎって与えた」

- (29) a. Окна гыч мүкш
- чонгештен пурыш.
- (RM)

窓 から ミツバチ 飛んで 入った

「窓からミツバチが舞い込んだ」

- b. Кайык пыжаш гычше чонештен лекте. (RM)
鳥 巢 から 飛んで 出た
「鳥が巢から飛び出た」

同様に, шогалаш「立つ」と шогалташ「立てる」, лекташ「出る」と лукташ「出す」, кодаш, -ам「残る」と кодаш, -ем「残す」のような自他の対立の関係にある動詞は, 補助動詞としてもこの対立を保つ。このような場合, 前項動詞と後項動詞の自他が同じになるのがふつうである。

- (30) a. Палыдыме ўдыр пурен шогале.
見知らぬ 少女 入って 立った
「見知らぬ娘が入って来た」
- b. Миронов ражгерыш отрядшым пуртен шогалтыш. (C 53)
ミロノフ 谷へ 分隊を 入れて 立たせた
「ミロノフは谷へ自分の分隊を入れた」
- (31) a. Тудо тоштыенг ойым печатлен луктын. (T 18)
彼 古人 ことばを印刷して 出した
「彼は言い伝えを(本にまとめて)出版した」
- b. 1965 ийыште тудын книгаже печатлалт лектын. (M 12)
年に 彼の 本 印刷されて 出た
「1965年に彼の本が出版された」
- (32) a. Чыла тиде сенгымаш түрлө книгалаш возалт коদেশ. (T 7)
すべてこの 成果 種々の 本へ 書かれて 残る
「この成果はすべていろいろな本に記録されている」
- b. Нуно ятыр тоштыенг ойым возен коденыт. (T 18)
彼ら 多くの 古人 ことばを書いて 残した
「彼とはたくさんの言い伝えを記録した」

ここで補助動詞と呼ばれている動詞は, いずれも一般動詞としても用いられる動詞であり, この点で日本語の「(～テ)おく」, 「(～テ)みる」などとよく似た動詞のクラスをつくっている。これに対し, 一般動詞としての用法がなく, 補助動詞としての用法だけしかない動詞がないわけではない。керташ「～することが可能である」と мошташ「～する能力がある」がそれである。

- (33) a. Тудо тиде пашам ыштен кертеш мо? (RM)
 彼 この 仕事を して できる か
 「彼はこの仕事ができるだろうか」
- b. Нуно вүргеньым да күртньым левыктен моштеныт. (T 8)
 彼と 銅を と 鉄を 溶かして できた
 「彼らは銅や鉄を溶かすことを知っていた」

керташ か мошташ は, (30), (31), (32) の補助動詞とは異なり, どんな前項動詞とも結びつくことができるという特徴があるが, この点でよく似ているのが, 不定詞とともに用いられる тўнгалаш「始める」や非人称の күлеш「～する必要がある」のような動詞である。

- (34) a. Пий чытыраш тўнгалын. (T 26)
 犬 震える はじめた
 「犬は震えはじめた」
- b. Мыланна тидым пален налаш күлеш. (F 30)
 われわれに これを 知って 取る 必要がある
 「われわれをこれを知る必要がある」

マリ語の複合動詞の性格づけをするためには, (33) や (34) のような構文も研究する必要があるが, この点について詳しく検討することは別の機会にゆずりたい。

5

複合動詞の性格づけのもう1つの視点として, 前項動詞として受身形や使役形があらわれうるかどうかがある。

日本語の複合動詞の場合, 受身形と使役形があらわれる位置によって, 後項動詞は4つのタイプに分けられる。

- (A) 受身形・使役形が後項動詞の側にしかあらわれないもの (例: 切り倒す—切り倒される—切り倒させる)
- (B) 受身形・使役形が前項動詞の側にしかあらわれないもの (例: 切り損なう—切られ損なう—切らせ損なう)

- (C) 受身形・使役形が前項動詞・後項動詞いずれの側にもあらわれるもの（例：読み続ける—読み続けられる／読まれ続ける—読み続けさせる／読ませ続ける）
- (D) 受身形・使役形がふつうあらわれないもの（例：思いあたる，使いつける，言い渋る，疲れきる）

後項動詞の圧倒的多数は A 型と考えられるが，これは，前項動詞と後項動詞の結びつきが固く，複合動詞が1つの語彙的単位としてふるまうためであろう。受身形や使役形かが用いられるかどうかは，動詞の表わす動作や行為の性格と関係があり，複合動詞のみならず，動詞一般に関する問題である。したがって，D 型は，意味的に受身や使役となじまない複合動詞をつくる後項動詞として性格づけておけば十分であろう。

C 型の場合，受身形・使役形があらわれる位置が文全体の意味の違いを表わすのが一般的である。たとえば，次の2文を比較しよう。

- (35) a. 私は彼に本を読み続けさせた。
b. 私は彼に本を読ませ続けた。

(35a) では，私は彼に「本を読み続ける」ように働きかけたのに対し，(35b) では，私は彼に「本を読む」ように働きかけ続けたという違いがある。すなわち，「読み続ける」全体が使役の領域に含まれているのは (35a) だけである。(35b) では，「読む」主体と「続ける」主体が同一ではなく，「読み続ける」という行為が成立しない。したがって，(35a) の「読み続けさせる」は「読み続ける」の使役形と考えられるが，(35b) の「読ませ続ける」を「読み続ける」の使役形のひとつと見なすことには無理がある。「読ませ続ける」は，むしろ「読ませる」と「続ける」からなる複合動詞と考えるのが妥当であろう。

このように考えると，C 型の後項動詞のつくる複合動詞は，一般に受身形・使役形をもつ点で A 型と共通していると言える。

B 型の場合にも，同様の見方が適用できると考えられる。すなわち，「切り損なう」のタイプの複合動詞は，厳密な意味での受身形や使役形をもたない点で，D 型と共通点をもっていると考えられることができる。これに対し，「切

られ損なう」「切らせ損なう」のような構造は、「読まれはじめる」「読ませはじめる」と同様に、「切られる」または「切らせる」と「損なう」からなる複合動詞と見なすことができる。

問題は、受身形・使役形を前項動詞にできる後項動詞とそうでない後項動詞の違いが何に由来するかという点である。この点については、次のような仮説を立てておく。すなわち、「動詞+動詞」型の複合動詞は、複合語とされているが、語結合的性格をまったくもっていないわけではなく、また、その強弱は後項動詞のタイプによって違う。前項動詞に受身形や使役形があらわれることができるかどうかは、その後項動詞のつくる複合動詞の語結合的性格の強弱を表わす1つの指標になっていると考えられる。一般に、受身や使役に対して1つの語彙的単位としてしかふるまわない「切り倒す」のような場合には、語結合的性格が弱く、反対に、前項動詞に受身形や使役形があらわれることができる「～つづける」「～はじめる」などは、語結合的性格が強いと考えられる。

実際、語結合的性格が「～つづける」のタイプの複合動詞よりさらに強いと考えられる「～てしまう」のタイプの補助動詞構文では、受身形や使役形のテ形が自由にあらわれることができる。

- (36) a. 殺されてしまう—殺させてしまう
 b. 殴られてあげる—殴らせてあげる
 c. 怒られてみる—怒らせてみる

「～つづける」「～はじめる」などが補助動詞化していると言われる理由の1つがここにある。

6

日本語の受身形にあたるのは、マリ語では接尾辞 *-алт-* によって他動詞から派生された動詞(便宜上「受身動詞」と呼ぶ)である。

- (37) a. Ола лүм кугу буква дене возалтеш. (RM)
 町 名 大きい文字 で 書かれる
 「町の名は大文字で書かれる」

- b. Книгаже Йошкар-Олаште печатлалтын. (M 13)
 本 ヨシカル・オラで 印刷された
 「彼の本はヨシカル・オラで印刷された」
- c. Айдеме мланде гыч ышталтын. (T 25)
 人間 大地 から 作られた
 「人間は土から作られた」

上の例で用いられている возалташ, печатлалташ, ышталташ は、それぞれ возаш「書く」、печатлаш「印刷する」、ышташ「作る」から派生した受身動詞である。このような受身文の主語となっているのは、対応する他動詞文の目的語にあたる名詞句であるが、動作主は表現されない。

注意しておかなければならないのは、本来の意味で受身文と呼べるのは、受身動詞の用いられている文のごく一部にすぎず、大部分は、受身というより、通常「再帰 (возвратный, reflexive)」, 「中動 (средний, middle)」, 「相互 (взаимный, reciprocal)」などと呼ばれる意味を表わす文である。

- (38) a. Кече пыл дене леведалте. (U 22)
 太陽 雲 で 覆われた
 「太陽は雲に覆われた」
- b. Чолпан ден Миклай уэш өндалалтыч. (U 22)
 Чолпанと Миклай 新たに 引き寄せ合った
 「ЧолпанとМиклайはもう一度抱き合った」
- c. Йолташ-влак малаш возаш ямдылалтыт. (U 23)
 友人たち 眠る 横たわる 用意している
 「友人たちは就寝の用意をしている」

上の例で用いられている леведалташ, өндалалташ, ямдылалташ は、それぞれ леведаш「覆う」、өндалаш「引き寄せる」、ямдылаш「準備する」から接尾辞 -алт- によって派生した受身動詞である。

標準文法は、「能動」、「再帰 (возвратный)」、「使役」の3つの相 (залог) を認めるが、いわゆる受身にあたる場合は、再帰の下位区分のひとつとして挙げられているだけである。他方、マリ語には、構造上は典型的な受身文の条件を十分満たしているとはいえないが、機能的には受身文と同じ役割を果たしていると見てよい不定人称文がある。

(39) Тудо куэм шүдө ий ожно шындыме. (F 54)

その 白樺を 100 年 前 植えられた

「その白樺の木は 100 年前に植えられた」

この構文は、主語のない他動詞文で、述語は動詞の分詞形をとり、目的語はふつう対格で表示される。このように、受身に関する限り、マリ語と日本語との間の構造的な平行性は部分的にすぎず、本論文で用いる「受身動詞」という名称は、便宜上のものである。

これに対し、マリ語の使役文は日本語とうまく対応する。マリ語の使役文は、接尾辞 -ыкт- によって派生された動詞(「使役動詞」と呼ぶ)を用いて作られる。

(40) a. Эбат Эманлан гармоньым шоктыктыш. (U 24)

エバト エマンに アコーデオンを 演奏させた

「エバトはエマンにアコーデオンを演奏させた」

b. Юзо кува Золушкалан четлык омсам почыкта. (Co 24)

魔法使い 老婆 シンデレラに 鳥かご 扉を 開けさせる

「魔法使いの老婆はシンデレラに鳥かごの扉を開けさせる」

c. Эргыжлан шке шочмо шүжаржым ватылан налыкта. (T 42)

息子に 自分 生まれの 妹を 妻に 取らせる

「(彼は)息子に自分の妹を妻としてめとらせる」

(41) a. Тудым онгыран имне дене кудальштыктат. (Kü 71)

彼を 鈴のついた 馬 で 走らせる

「(彼らは)彼を鈴のついた馬で走らせた」

b. Азам вара утларак шуко жапым кумык кийыктат. (A 38)

幼児を 後に もっと 多い 時間を うつぶせに 横たわらせる

「幼児は、後になったら、もっと長い時間うつぶせに寝かせる」

c. Чылаштымат чүчкыдынак пасуш пашам ышташ коштык-

彼らみんなを しばしば 野良へ 仕事を する 行かせた

теныт. (S 104)

「彼らみんなをしばしば野良へ仕事をしに行かせた」

(40) で用いられている使役動詞 шоктыкташ, почыкташ, налыкташ は、それぞれ他動詞の шокташ 「演奏する」、почаш 「開ける」、налаш 「取る」

から派生したものであり、(41) で用いられている使役動詞 *кудалыкташ*, *кийыкташ*, *коштыкташ* は、それぞれ自動詞の *кудалаш* 「(馬に乗って) 走る」、*кияш* 「横たわる」、*кошташ* 「行く、行ってくる」から派生したものである。使役動詞のもとになっている動詞の主語にあたる名詞句を被使役者 (causee) と呼ぶことにすれば、被使役者は、(40) のように他動詞文がもとになっている使役文では与格で表わされ、(41) のように自動詞文がもとになっている場合は、対格で表わされる。

受身と使役を複合動詞との関連で考察すると、マリ語の受身動詞と使役動詞の性格がかなり違っていることが明らかになる。

複合動詞に対応する受身形では、前項動詞が受身動詞になるだけでなく、後項動詞に対応する自動詞にとってかわるのがもっとも一般的である。

(42) a. *Тиде книга кокымшо гана печатлалт лектеш.* (RM)

この本 2 番目 回 印刷されて 出る

「この本は第 2 刷が出る」

b. *Чыла тиде сенгымаш турлө книгалаш возалт кодеш.* (T 7)

すべて この 成果 種々の 本へ 書かれて 残る

「この成果はすべていろいろな本に記録されている」 [= 32a]

上の例で用いられている *печатлалт лекташ* (*печатлалташ* 「印刷される」、*лекташ* 「出る」), *возалт кодаш* (*возалташ* 「書かれる」, *кодаш*, -ам 「残る」) は、それぞれ *печатлен лукташ* (*печатлаш* 「印刷する」, *лукташ* 「出す」), *возен кодаш* (*возаш*, -ем 「書く」, *кодаш*, -ем 「残す」) に対応する受身形である。

同じ原理は、本来の意味での受身を表わさない場合でもなりたつ。

(43) a. *Мланде туге шельшталт пытен.* (G 48)

大地 かくて 砕けて おわった

「かくて大地は砕けてしまった」

b. *погынымаште ойлаш ямдылалт шуаш* (RM)

集会で 話す 用意して 届く

「集会でスピーチをする用意をする」

上の例で、*шельшталт пыташ* (*шельшталташ* 「砕ける」, *пыташ* 「終わ

る]), ямдылалт шуаш (ямдылалташ「心構える」, шуаш「届く」) は, それぞれ шельштен пытараш (шельшташ「砕く」, пытараш「終える」), ямдылен шукташ (ямдылаш「準備する」, шукташ「遂げる」) に対応する「受身形」である。

これに対し, 使役形は後項動詞に接尾辞 -ыкт- がつき, 前項動詞はそのままである。

- (44) а. Лүштышö-влаклан тудо кодшо ий мыняр шөр пуымыштым
搾乳人たちに 彼 昨 年 いくら 牛乳 与えたかを

возен налыктыш. (U 24)

書いて 取らせた

「彼は搾乳人たちに(牛たちが)去年どれだけ牛乳を出したかを表にさせた」

- б. Генерал ватын үмбалысе вургемжым кудашыкта кугыжа,
將軍 妻の 上の 衣服を 脱がせる 皇帝

вара күтызö үдырлан чиктен шогалтыкта. (G 50)

そして牛飼 娘に 着せて 立たせる

「皇帝は將軍夫人から衣服を脱がせると, 牛飼の娘に着せさせた」

上の例で, возен налыкташ (возаш, -ем「書く」, налыкташ「取らせる」), чиктен шогалтыкташ (чикташ「着せる」, шогалтыкташ「立てさせる」) は, それぞれ возен налаш (налаш「取る」), чиктен шогалташ (шогалташ「立てる」) に対する使役形である。

同様の現象は, 標準文法で複合動詞とされない「н形+定形動詞」の場合にも見られる。

- (45) Тудым ялысе апшатлан пужен ыштыкташ логале. (U 24)

それを 村の 鍛冶屋に 分解して 作らせる ねばならなかった

「それを村の鍛冶屋に修繕させなければならなかった」

上の例の пужен ыштыкташ (пужаш「分解する」, ыштыкташ「作らせる」) は, пужен ышташ (ышташ「作る」) に対応する使役形である。

日本語の複合動詞が受身と使役に関して対称的にふるまうことを前節で見たが, マリ語の複合動詞の場合は, (42) と (44) に見られるように, ふるまいが受身と使役に対して対称性を欠いている。このような構造的な差が生じ

る原因は、マリ語の場合、(40)のような使役動詞構文が統語的過程として成立しているのに対し、(37)のような受身動詞の用いられた文は統語的になんら特別な構文をなしていないためであろう。いいかえると、マリ語では、「受身動詞」を用いた文が受身を表わすかどうかは、構文のレベルの問題ではなく、個々の受身動詞の意味と文脈の問題であると考えた方がよい。したがって、厳密な意味での受身形を複合動詞から作る手段がなく、そのかわりを、「受身動詞+自動詞」という複合動詞が果しているのだと考えられる。

ただし、複合動詞から作られた受身動詞がまったくないわけではなさそうである。

- (46) a. Тудо действийын кенета ышталт пытымыжым ончыкта.
 それ 行為の 急に なされて 終わることを 見せる
 「それは行為が急に完了されることを表わす」 (U 68)
- b. Тудо действийжын ыштен пытаралтмыжым ончыкта.
 それ 行為の して 終わられることを 見せる
 「それはその行為が完了されることを表わす」 (U 65-6)

上の例の ышталт пыташ (ышталташ 「なされる」、пыташ 「終わる」) と ыштен пытаралташ (ышташ 「する」、пытаралташ 「終わられる」) は、いずれも ыштен пытараш (пытараш 「終わる」) に対する受身を表わし、とくに ыштен пытаралташ は形の上でも ыштен пытараш の受身形である。このタイプの例は、他に見つかっていないので、例外としてあげるにとどめる。

7

マリ語の複合動詞は、前項動詞の形態的特徴、前項動詞と後項動詞の間の意味的關係、受身と使役との關係において、日本語の複合動詞ないしは「テ形+補助動詞」構造と驚くほどよく似た原理にもとづいて組み立てられている言語形式であると言ってよい。

類型論的に見ると、マリ語は日本語と大変よく似たタイプの言語であり、本論文で考察した複合動詞のように、日本語の生き写しではないかと思われるほどよく似た並行現象が見られるとしても、それほど不思議なこととは言

えないであろう。このような並行現象の研究においては、日本語を対象としてこれまでなされてきた研究やその成果が大いに役立つはずである。

他方、これまでの日本語研究では、複合動詞がとりあげられても、日本語の文法の問題として扱われる傾向があり、より一般的な観点から分析されることはほとんどなかったようである。今後は、日本語をより広い視野の中に据えて、日本語の文法構造のこれまでに見えていなかった側面を明らかにしていくような視点が必要とされるであろう。

〔付記〕

日本語の複合動詞およびそれに関連する問題に関して、筆者に親切にご教示下さった国立国語研究所の石井正彦氏にお礼を申し上げる。氏のご教示が十分生かされていないとすれば、すべて筆者の研究不足によるものである。

尚、本論文で用いたマリ語の用例の中には、長さを調節するために、固有名詞を人称代名詞にかえたり、一部修飾句を省略するなどして手を加えたものがある。用例の出典は略号によって示した。数字はページを表わしている。

参 考 文 献

- 関 一雄 (1971) 「補助動詞と用言的接尾語」『国語と国文学』48巻12号, 54-69.
 武部良明 (1953) 「複合動詞における補助動詞的要素に就いて」『金田一博士古稀記念言語民俗論叢』(三省堂), 461-476.
 長嶋善郎 (1976) 「複合動詞の構造」『日本語の語彙と表現』(鈴木孝夫編, 大修館書店), 63-104.
 森田良行 (1982) 「活用形の用法」『日本語教育事典』(大修館書店), 133-134.
 吉川武時, 姫野昌子 (1982) 「補助動詞」『日本語教育事典』(大修館書店), 121-123.
 Галкин И. С. (1958) *Залог в марийском языке*. Йошкар-Ола: МарНИИ.
 Исамбаев Н. И. (1961) *Деепричастия в марийском языке*. Йошкар-Ола: МарНИИ.
 Исанбаев Н. И. (1978) Общее и отличительное в составных глаголах марийского и поволжско-тюрских языков. — *Вопросы марийского языка* (Йошкар-Ола: МарНИИ), 59-90.
 Петухова Л. А. (1982) Глагольные словосочетания с зависимым деепричастием. — *Вопросы марийского языка* (Йошкар-Ола: МарНИИ), 105-123.
Современный марийский язык. Морфология. Йошкар-Ола: Марийское книжное издательство, 1961.

- Учаев З. В. (1985) *Марий йылме*. Йошкар-Ола: Марий книга издательство.
Численность и состав населения СССР. По данным Всесоюзной переписи населения 1979 года. Москва: Финансы и статистика, 1984.
- Чхайдзе М. П. (1960) *Спаренные глаголы в марийском языке*. Йошкар-Ола: Марийское книжное издательство.
- Čhaidze, Michail (1968) Paired verbs in some East Uralic and other Oriental languages. — *Советское финно-угроведение* 4.285-97.

用例の出典とその略号

- A = Сперенский Г. Н. (1954) *Ачан-аважлан мом шинчыман*.
- C = Чхайдзе М. П. (1960) *Спаренные глаголы в марийском языке*.
- Co = *Чодыра памаш*. 4-ше классыште урок деч вара лудшаш книга. 1979.
- F = *Марий фольклор ден литература*. 1945.
- G = Галкин И. С. (1958) *Залогии в марийском языке*.
- I = Исамбаев Н. И. (1961) *Деепричастия в марийском языке*.
- Kü = Китиков А. Е. (1979) *Кӱслезе тукым*.
- M = Васин, Ким (1974) *Муро апишат*.
- P = Петухова Л. А. (1982) Глагольные словосочетания с зависимым деепричастием.
- R = Краснов А. В. (1984) *Кузе да молан религий шочын*.
- RM = *Русско-марийский словарь*. 1966.
- S = Айплатов Г. (1974) *Марий кундем кресаньык сар жапыште*. *Ончыко* 1976/4.
- T = *Тошто марий ой-влак*. 1972.
- U = Учаев З. В. (1985) *Марий йылме*.